

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23320158

研究課題名(和文)メロヴィング王朝期国家構造の総合的研究ー西洋古代から中世への移行新論ー

研究課題名(英文)An over-all study of State structure in Merovingian times - new theory of historical transition from the late Antiquity to the early Middle Ages.

研究代表者

佐藤 彰一 (SATO, SHOICHI)

名古屋大学・高等研究院・名誉教授

研究者番号：80131126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,500,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、西洋中世初期における最重要の歴史的存在であったフランク国家がいかにして形成されたかを、西ローマ帝国が体現した後期古代から、初期中世の時代相への移行についての新たな理解を基軸に据えて考察し直したものである。新しい論点として浮上したのは、西暦394年のアルボガストのクーデタの挫折により、フランク人首長層がローマ帝国内で30年間にわたって成し遂げた栄達の時代が終わり、以後約半世紀にわたって断片的な動静しか伝来しておらず、この50年間のフランク史の解明が、この主題にとって決定的に重要であるという点である。これまで注目を集めてこなかった、フン族とフランク人との関係史を深めるのも重要である。

研究成果の概要(英文)：This research project lies in the formation of Merovingian State from a renewed point of view of the historical phase of transition from the Late Antiquity embodied in the West Roman Empire, to the Early Medieval State formations. It raised vast problem of how developed the Frankish tribes in Roman political circumstance, after the fail of coup d'etat mounted by Frankish magister militum Arbogast in 394 until an appearance of Childebert 1st in the year around 456 on historical written sources. Comparing to a huge success that had enjoyed this German tribes during more than a generation in the Roman military hierarchy, it is very impressive that we only have scant and sporadic references on the Frankish tribes in historical document thereafter. As almost of all the German tribes, except the Visigoths, were under the hegemony of the Huns during former half of the 5th century, we should look at this aspect.

研究分野：西洋中世史

 キーワード：西ローマ帝国 アルボガスト キルデベルト1世 古代から中世への移行 フランク族 メロヴィング
 国家 フン族 メロヴィング朝

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成23年度に本研究課題を開始した際には、近代国家に範をとった「国家観」が、依然として我が国の西洋中世史家の間で主流であった。

(2) 西洋中世世界において最も重要な役割を果たし、最も長く存続したフランク国家の担い手であるフランク人の部族形成の過程は、まだ十分に解明されていなかった。

(3) 西暦4世紀の後半にヨーロッパに侵入した、トルコ系遊牧騎馬民族とされるフン族がゲルマン諸民族の政治と社会に与えたインパクトが十分評価されていなかった。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトは上記3点を主要な検討課題として、西ローマ帝国の政治的崩壊から、初期フランク国家、すなわちメロヴィング国家への移行を、これまでとは異なる視点から捉え、加えてメロヴィング国家の独自の構造や権力の機能作用を解明しようとした。

3. 研究の方法

方法論上の基本は、歴史学において史料は文献学とコンテキスト論双方の手法で解読して過去を再構成するというのが一般である。これに加えて、ことにメロヴィング国家構造の研究において、史料に名前が記載されている国家役人の悉皆調査(217名)を基礎にしたプロソポグラフィの手法を企図した。さらに広い意味での「研究の方法」に数えることができるであろうが、「フランク人の部族形成と国家形成」を、グローバル・ヒストリーの視点から考察した。この最後の視座は本研究プロジェクトの枠内では十分に深めることができなかつたのは遺憾であるが、エルベ川河口地帯を元々の定住地としていた「フランク人」が紀元前1千年紀に始まる世界システムの、景況波動のなかで西方のフリースラント海岸地方に移動し、やがてローマ帝国の北西辺境トクサンドリア地方への定着を許され、帝国の軍事力の一翼を担うまでの歴史的展開の大きな見取図を描くことが可能となった。

4. 研究成果

(1) フランスのグローバル史家フィリップ・ボジャールは2012年に『インド洋をめぐる諸世界 Les mondes de l'Océan indien』と題する紀元前4千年紀から紀元後15世紀までの世界システム論を骨格とする1500頁の大著を出版した。このなかで前1200年ころにそれまでの世界システムが「内破」し、システム連関がブレークダウンするものの、前1千年頃、すなわち鉄器時代に入ると新しい世界システムが形成される端緒が開かれる。前1千年紀を通じて、アジア、ヨーロッパ、アフリカの一部を包含する最初の世界システムが誕生する。

こうした先史時代のコンテキストを背景に、エルベ川河口地帯からユラン半島の北海沿岸や島嶼に定住していたゲルマン人は、前

1800年頃の初期青銅器時代から、エルベ川を通商路とする地中海地方との交易を盛んに行なっていた。この地方から産出される主要な商品は錫、とりわけ琥珀である。前1千年紀後半に入り、ローマ帝国の経済力が強大になるにつれて、フランク人の祖先たちもエルベ地方からローマ経済からの恩恵を期待して、西に移動しライン川の河口に横たわるボルクム島(Borkum)に定着した。ボルクム島は大プリニウスの証言するところではローマ時代にパウノニア(Baunonia)と称された。6世紀末にトゥール司教グレゴリウスは、フランク人の「原郷」を「パンノニア」であると記したが、それは「パウノニア」の転訛であるというのが多くの研究者、ことにフランク人のエトノス形成史に決定的な貢献をしたハイケ・グラーン=ヘック(以後G=Hと略称)の見解である。

(2) フランク人のエトノス形成に関して、古典的な見方は、そもそもフランク人には二つの集団、すなわちライン川に定着したリプアリア・フランク人と、北海沿岸のサリー・フランク人が存在したとするものであった。G=Hはこれを否定し、一段と流動的なエトノス像を提示した。主に4世紀の皇帝に捧げられた『ラテン頌詩集』を基本史料にして、元来フランク人を形容する2種類の呼称法があったとする。Francusとは「勇敢な者、大胆不敵な者」を形容する一般語であるが、タキトゥスが引用するシャマヴィー、アムスヴァリ、ブルクテールなどの古い部族も、時として、その行動の果敢なせいで「フランキ(複数形)」と呼ばれることがあるが、彼らのアイデンティティの所在は、古い方のシャマヴィーであったり、ブルクテールであったりした。これに対して「フランク人そのひとFranci ipsi」と形容される集団がいた。これこそが、後にフランク人、わけでもサリー・フランク人と称された人々であった。

サリー(Salii)という名称は、この集団の独特な居住形態に由来している。それはこの種のフランク人が定住した、オランダ地方でしばしば考古学的痕跡が見つかる複数の世帯が共同で生活する、大ホール型の長棟住居を意味した。それは家畜小屋を含んだ「居住、経済活動を行う」建物の意味で使われた。サリー・フランク人とは、こうした居住形態をもったフランク人エトノス集団であった。

彼らは西暦3世紀に盛んに海賊活動を行い、北海地方だけでなく、ジブラルタル海峡を抜けて南スペイン沿岸諸都市、北アフリカ沿岸、果ては黒海地方まで、その活動の幅を広げる。3世紀が世界システムの上で、どのような景況であったかが、フランク人の侵略活動から、一つの問題として提起される。これは後にバイキングがアッパース朝カリフと西ヨーロッパとの交易を担っていたのが、その交易に翳りが萌した頃に略奪遠征に乗り出したこととパラレルな関係があるのではないかと思わせるからである。

(3) 3世紀の後半にサリー・フランク人はフリースラント沖のバタヴィア島に定着したが、6世紀ビザンツの歴史家ゾシモスが伝えているところでは、サリー・フランク人はシャマヴィー人によってこの島から駆逐された後に、ベルギー北西部のトクサンドリアへの定着をユリアヌス帝により許された。これが4世紀中頃のことである。この頃にはすでにライン川中流にもサリー・フランク人は進出していたが、彼らはライン川のフランク人と形容されるようになる。

サリー・フランク人、ライン・フランク人ともにその首長クラスが、4世紀の最後の30年に、ローマ帝国の政界と軍隊世界で異様とも言える栄達を遂げる。軍司令官(magister militum)や執政官にまで登りつめる者まで輩出した。だが西帝国の軍司令官であったフランク人アルボガストが、395年にクーデタに失敗した後は、ローマ軍政、民政の世界からフランク人は姿を消す。代わってゴート人がヘゲモニーを掌握することになる。フランク人の初期史において、最も解明が進んでいないのはクローヴィスの父であったキルデリクス1世が登場するまでの60年間である。この間にアッティラの率いるフン族の西方への進出があり、ゲルマン諸族は多少なりともその覇権を受け入れ、その騎馬文化に大きな影響を受けた。それ以前にはなかった騎馬の埋葬が、エルベ川地方にまで浸透したことは考古学的な研究の成果から知られているからである。この点については後掲の「キルデリクス1世とドナウ戦士文化」『西洋中世研究』(2013年)において詳論した。しかし遊牧騎馬文化のゲルマン人集団への影響については、実は欧米でもまだ十分に深められていない論点であり、さらなる検討が求められる問題である。

(4) 476年秋、ゲルマン人出身の傭兵隊長オドアケルが西ローマ皇帝ロムルス・アウグストルスに即位したものの、自らは皇帝に即位することを控えたことにより、西ローマ帝国は皇帝不在の状態が永続化し、後世からこの年を「西ローマ帝国」終焉の年とみなされることになった。だが476年の前後5年間ほどのイタリア及びガリアの政治状況は、輻輳を極め、また網羅的な史料所見の徹底した検討が果たされているとは言い難い。

そもそもオドアケルという人物は厳密に言えばゲルマン人ではなく、父のエディコはアッティラの腹心の一人であった。ローマ人出身で同じアッティラの腹心であったオレステスとともに主君の命によりコンスタンティノーブルに使節として派遣されたが、オレステスはパンノニア出身で皇帝ロムルス・アウグストルスの父であった。オドアケルにはオノウルフスという名前の兄弟がいた。453年のアッティラが死去すると、フン族は内紛が起こり弱体化し、469年のボリアの戦いでフン勢力は四散する。この戦いでオドアケルの父は戦死し、オノウルフスは

東ローマ帝国の官僚となり、オドアケルはそれ以前に西方に向かい、北海沿岸を荒らしまわっていたザクセン人を率いて、としアンジェを占領している。トゥール司教グレゴリウスは『歴史十書』の中で、470年にキルデリクス1世とオドアケルが協力してイタリアを侵略しているアラマン人をガリアで討伐する約束をしたと伝えている。

この後どうやらオドアケルはイタリアに向かったようであるが、その途中ノリウム(現在のスイス・オーストリア)で聖セヴェリヌスの僧庵を訪問したことを、エウギッピウスが著した『聖セヴェリヌス伝』が証言している。そしてこの聖人により、将来イタリアの支配者になると言われた。オドアケルは帝位から廃したロムルス・アウグストルスを年6000ソリドゥスの年金を与えてカンパニア地方に送ったが、聖セヴェリヌスが他界した後に、弟子のエウギッピウスが師の遺骸を安置して修道院を建立したナポリ近くのCastellum Lucullanumこそ、ロムルス・アウグストルス配流の地であったことを考えるならば、エウギッピウスの修道院建設の用地を提供した人物として、真っ先に考慮しなければならないのはオドアケルである。

オドアケルの兄弟オノウルフスはアルマトゥスという名前の有力者の引き立てでイリュリウムの軍司令官となるが、アルマトゥスなる人物は476年東ローマ帝国の執政官に任命された。オドアケルがロムルス・アウグストルスを廃位した後で、あえて自らが皇帝に即位しなかったのは、オドアケル自身が属する門閥が、今や帝国の東西に配置されている濃密な人脈を前提に、一人の皇帝(東皇帝バシリスクス)が東西ローマを一体として支配する体制を構想したことに根本的原因があったのだ、というのが歴史家S・クラウトシツクの仮説である。東ローマ帝国の『外交要録』に断片として残されているフラデルフィアのマルクスの証言によれば、「オレステスの息子ロムルス・アウグストルスは、ゼノンがバシリスクスを駆逐し、再び東の帝位を回復したと聞くと、元老院に使節を派遣して二つの別々の帝国統治は不要であり、二つの領土を一人の皇帝が統治するだけで十分であることを提案するよう申しつけた」とされている。

こうした人物史的サーヴェイを徹底することにより、古代末期から初期中世への移行に政治史の角度から新しい光を当てることができよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計33件)

1. 佐藤彰一「P. Boucheron, Faire profession d'historien」, 『西洋中世研究』第3号, 2011年, 175-176頁。査読有り

2. 佐藤彰一 「F. Dosse, Renaissance de l'événement. Un défi pour l'historien entre Sphinx et Phénix」, 『西洋中世研究』第3号, 2011年, 181-182頁。査読有り
3. 佐藤彰一 「P. Heather, Empires and Barbarians: Migration, Development and the Birth of Europe」, 『西洋中世研究』第3号, 2011年, 190-191頁。査読有り
4. 佐藤彰一 「W. Pohl et ali, Der Frühmittelalterliche Staat-Europäische Perspektiven」第3号, 2011年, 207-208頁。査読有り
5. 佐藤彰一 「G. Traina, 428. Une année ordinaire à la fin de l'empire romain」 『西洋中世研究』第3号, 2011年, 210-211頁。査読有り
6. 佐藤彰一 「C. Wickham, The Inheritance of Rome. A History of Europe from 400 to 1000」 『西洋中世研究』第3号, 2011年, 212-213頁。査読有り
7. 佐藤彰一 「解釈学と時間-歴史テキストの時間性-」松澤和宏編『テキストの解釈学』, 水声社, 2012年, 353-374頁。査読有り
8. SATO, Shoichi, 「Hermeneutics and Time」 『HERSETECH: Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration』 Vol.5, 2011(2012), pp.1-11.査読有り
9. SATO, Shoichi, 「Sindbad au Japon? Les échanges maritimes entre le Proche-Orient et l' Extrême-Orient d' après le trésor du SHOSO-IN」, M. SOT/D. Barthélemy, L' Islam au Carrefour des Civilisations Médiévales, PUPS, 2012, pp. 81-89.査読有り
10. SATO, Shoichi, 「La "colonica" rémoise dans deux des documents du haut moyen âge, Mélanges offerts à Michel Sot, PUPS, 2012, pp.425-423.査読有り
11. 佐藤彰一 「S. Baage et ali., Feudalism: New Landscapes of Debate」 『西洋中世研究』第4号, 2012年, 197-198頁。査読有り
12. 佐藤彰一 「J. Haldon (ed.), Money, Power and Politics in Early Islamic Syria: A Review of Current Debates」 『西洋中世研究』第4号, 2012年, 212-213頁。査読有り
13. 佐藤彰一 「J. Haword-Johnston, Witness to a World Crisis: Historians and Histories of the East in the Seventh Century」 『西洋中世研究』第4号, 2012年, 215-216頁。査読有り
14. 佐藤彰一 「M. McCormick, Charlemagne's Survey of the Holy Land: Wealth, Personnel, and Buildings of a Mediterranean Church between Antiquity and the Middle Ages」 『西洋中世研究』, 第4号, 2012年, 219-220頁。査読有り
15. 佐藤彰一 「K. Weber, Die Formierung des Elsass in Regnum Francorum: Adel, Kirche und Königtum am Oberrhein im merovingischer und frühkarolingischer Zeit」 『西洋中世研究』, 第4号, 2012年, 231-232頁。査読有り
16. 佐藤彰一 「キルデリクス1世とドナウ戦士文化」 『西洋中世研究』, 第5号, 2013年, 49-68頁。査読有り
17. 佐藤彰一 「神の裁きをめぐる権力配置-轟木広太郎『戦うことと裁くこと』」 『思想』(岩波書店), 2013年1月号, 124-134頁。査読有り
18. 佐藤彰一 「Ph. Beaujard, Les mondes de l' Océan indien, t.1, De la formation de l' État au système monde Afro-Eurasien 4e millénaire av. J-Ch.-Vie siècle ap. J-Ch., t.2, L' Océan indien au Coeur de la globalization de l' Ancien Monde(7e-15e siècle)」 『西洋中世研究』, 第5号, 2013年, 159-160頁。査読有り
19. 佐藤彰一 「M.S. Bjornlie, Politics and tradition between Rome, Ravenna and Constantinople. A Study of Cassiodorus and the Variae, 527-554」 『西洋中世研究』, 第5号, 2013年, 161-162頁。査読有り
20. 佐藤彰一 「M. Czock, Gottes Haus. Untersuchungen zur Kirche als heiligen Raum von dem Spätantike bis zum Frühmittelalter」 『西洋中世研究』, 第5号, 2013年, 168頁。査読有り
21. 佐藤彰一 「V. Toneatto, Les banquiers du Seigneur. Évêques et moines face à la richesse (IVe- début IXe siècle)」 『西洋中世研究』, 第5号, 2013年, 192頁。査読有り
22. 佐藤彰一 「E. F. Arnold, Negotiating the Landscape: Environment and Monastic Identity in the Medieval Ardennes」 『西洋中世研究』, 第6号, 2014年, 214-215頁。査読有り
23. 佐藤彰一 「P. Brown, Through the Eye of a Needle: Wealth, the fall of Rome, and the Making of Christianity in the West, 350-550 AD.」 『西洋中世研究』, 第6号, 2014年, 218-219頁。査読有り
24. 佐藤彰一 「C. Camby, Wergeld ou uueregildus: Le rachat pécuniaire de l' offence entre continuités romaines et innovation germanique」 『西洋中世研究』, 第6号, 2014年, 219-220頁。査読有り
25. 佐藤彰一 「多田哲『ヨーロッパ中世の民衆教化と聖人崇敬-カロリング時代のオルレアンとリエージュ』」 『西洋史学』, 第256号, 2015年, 73-75頁。査読有り
26. 佐藤彰一 「A. Al-Azmeh, The Emergence of Islam in Late Antiquity: Allah and his People」 『西洋中世研究』, 第7号, 2015年, 160-161頁。査読有り
27. 佐藤彰一 「D. Balthélemy/ J. -M. Martin (éd.), Richesse et croissance au Moyen Âge. Orient et Occident」 『西洋中世研究』, 第7号, 2015年, 164-165頁。査読有り
28. 佐藤彰一 「J.-L. Brunaux, Les Celtes: Histoire d' un mythe」 『西洋中世研究』, 第

- 7号, 2015年, 167-168頁。査読有り
29. 佐藤彰一 「J.-P. Demoule, Mais où sont passés les Indo-Européens? Le mythe d'origine de l'Occident」『西洋中世研究』, 第7号, 2015年, 173-174頁。査読有り
30. 佐藤彰一 「M.Maier/S.Patzold(hrsg.), Chlodwigs Welt : Organisation von Herrschaft um 500」『西洋中世研究』, 第7号, 2015年, 186-187頁。査読有り
31. 佐藤彰一 「R.Meens, Penance in Medieval Europe, 600-1200」『西洋中世研究』, 第7号, 2015年, 190-191頁。査読有り
32. 佐藤彰一 「菊地重仁「中心と周縁を結ぶ-カロリング朝フランク王国における命令伝達・執行の諸相について」」『法制史研究』, 第65巻, 2015年度, 325-327頁。査読有り
33. 佐藤彰一 「菊地重仁「複合国家としてのフランク帝国における「改革」の試み-カール大帝皇帝戴冠直後の状況を中心に」」『法制史研究』, 第65巻, 327-329頁。査読有り

〔学会発表〕(計6件)

1. SATO, Shoichi “ Sindbad jusqu' au Japon? ”, Colloque international et inter-disciplinaire: La rencontre des civilisations autour du monde musulman (VIIIe-XIVe siècle AD), Abou Dhabi, le 9 mars 2011.
2. 佐藤彰一 「シャルルマーニュとヨーロッパ-グローバル・コンテクストの視点から-」(招待講演) EU インスティテュート九州, 2012年11月18日, 福岡女子大学
3. 佐藤彰一 「蜂と蟬-5世紀フランク族の政治動向」平成25年度第1回比較国制史研究会, 2013年7月13日, 北海道大学東京エクステンション・センター
4. 佐藤彰一 「キルデリクス1世とテューリングン族問題-5世紀中葉の政治動向-」第12回歴史家協会大会(特別講演), 2013年6月15日 関西大学
5. 佐藤彰一 「西暦一千年紀におけるユーラシア・インド洋交易」立教大学文学部公開講演, 2014年5月30日
6. 佐藤彰一 「オドアケル再考」第64回日本西洋史学会 ポスター・セッション, 2014年6月2日 立教大学

〔図書〕(計4件)

(著書)

1. 佐藤彰一 『カール大帝』山川出版社, 2013年, 104頁。
2. 佐藤彰一 『禁欲のヨーロッパ-修道院の起源-』中央公論新社, 2014年, 282頁。
(翻訳)
3. 佐藤彰一 P. K. クロスリー著, 『グローバル・ヒストリーとは何か』岩波書店, 2012年, 185頁。
4. 佐藤彰一, 瀬戸直彦(共訳) B. ビショップ著 『西洋写本学』岩波書店, 2015年, 472頁。

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
- (1) 研究代表者 佐藤彰一
(SATO SHOICHI)
名古屋大学・高等研究院・名誉教授
研究者番号: 80131126
- (2) 研究分担者 なし
()
研究者番号:
- (3) 連携研究者 なし
()
研究者番号: